

## 「玉取物語」の材源と特質

——久生十蘭論 VII——

須田千里

はじめに

「玉取物語」は、直木賞受賞作となった「鈴木主水」(昭和二十六年十一月一日「オール読物」)とほぼ同時に「別冊文藝春秋」(十月三十日)に発表、のち『うすゆき抄』(昭和二十七年九月文藝春秋新社)に収録された。久生十蘭の脂の乗りきった時期の作品といえよう。

三一書房『久生十蘭全集』Ⅱ(一九七〇年一月)澁澤龍彦「解説」は、久生十蘭の本質である「スタイルを味わうという、小説本来の楽しみ」を強調した上で、本作の「飄逸な擬古文体」の「堂に入った語り口の技巧と洗練」を称賛する。現代教養文庫『無月物語 久生十蘭傑作選Ⅴ』(一九七七年二月社会思想社、披見本は一九八七年六月初版第三刷)都筑道夫「男ぶりの小説、女ぶりの小説」も、「文体と構成のまったく難点のない作品として、私がこの一冊のなかで、もっとも惚れこんでいるのは、『無月物語』と『玉取物語』の二篇であることをいいそえて、解説をおわりたい。」と絶賛。向井敏「本のなかの本」(一九八六年三月毎日新聞社、披見本は同年四月第二刷)「タマは一つでも用は足せる 久生十蘭『玉取物語』」(末尾に「82・10

・3」とある)も、「起承転結みにことに整い、文章の綺羅をつくし、話術の芸をきわめた「珠玉」の短篇」であり、同時期の「シリアス仕立てのきりりとした短篇」が多い中での「変り種」、「時代ものの名作には珍しく、これは抱腹絶倒のユーモア仕立て。」と評する。さらに同文は、芥川龍之介「鼻」(大正五年二月「新思潮」)の筋立てを意識したふしがあるが、「青っぽい思い入れを排した自在な展開、古文をもじった軽妙な文体、わけでも警拔で豊かなユーモアは『鼻』の敵するところではない。」と高く評価している。本作から「鼻」への連想は、自身の左陰囊内辜丸脇にできた硬肉芽腫瘍摘出の経緯を記す藤原作弥「玉取物語」(一九九〇年十月「文藝春秋」)も同様である。講談社文芸文庫『湖畔 ハムレット 久生十蘭作品集』(二〇〇五年八月、江口雄輔解説)にも収録されており、比較的有名な作品といえよう。

本作の主典拠を山内豊城「玉とり日記」別名「やまひの草紙追加」と指摘し、内藤達『遺魯伝習生始末』(昭和十八年九月東洋堂)を参照した可能性が高いとしたのが、『定本久生十蘭全集8』(二〇一〇年十一月国書刊行会、浜田雄介「解題」(以下「全集解題」と略)である。後述するように、「玉とり日記」

本文のみならず、『遣魯伝習生始末』の地の文や註を利用した個所もあることから、典拠が『遣魯伝習生始末』であることは動かない（以下「典拠」と略）。なお、全集解題が記すように「同方会誌」五十七（昭和七年五月、ただし内題下に「昭和七年三月編」とある）に「玉とり日記 山内豊城 古人」が掲載（前書き八行を付す）。また、その概要は森銑三「山内豊城の「玉とり」の日記」（昭和十八年八月大道書房『近世人物叢談』所収<sup>(3)</sup>）に記されている。

本稿では、材源として『遣魯伝習生始末』その他を明らかにした上で、その全体像を考察したい。

## 一 『遣魯伝習生始末』——主典拠——

『遣魯伝習生始末』によれば、主人公山内豊城（一八〇二～六八）の先祖は、元和年間（一六一五～二四）に「御先手与力番代りをして、初めて幕臣となり、世々江戸に住した。」（二、山内作左衛門「一、おひたち」「A山内家譜」一一七頁）。父信経は松平定節に仕えた「中流武家」（B山内豊城「一二二頁」）だったが、文政元年（一一八一）に死没したため、豊城は翌年主家から暇を賜り、苦勞して寺子屋を開くなどした後、天保五年（一八三四）旗本伊奈遠江守忠告（二六四二石余）に仕えた。天保十四年、京都東町奉行に任命された伊奈に従って上京した豊城は、嘉永二年（一八四九）正月伊奈が小普請奉行に転じた際に随従して江戸に下向する間、右鞆丸の腫瘍に悩まされるが、同年十月手術によって除去し、慶応四年（一八六八）六月六十七歳で没した（B山内豊城「一二三～五頁」「C少年の頃」一

二九～一三〇頁、本書卷末年譜）。豊城は「有職故実に明るく、和歌に於ても既に一家を成してゐた。」（D山内一家と絵師岡田為恭「一三三頁」）。この教養が「玉とり日記」の文体を生み出している。

次に、本作との相違を整理したい。まず、豊城が右鞆丸に異常を覚え始めたのは「おとゝしの頃より」（E嘉永年間の鞆丸摘出手術「一四一頁」とあるように弘化四年（一八四七）頃からであり、前述の嘉永二年正月江戸下向の際には相当困難を感じたため、一月二八日に帰着した後、同年「かむな月四日のひ」（一四三頁所引「やまひの草紙追加 一名玉とり日記」）に手術を行った。ただし典拠の地の文では単純に一ヶ月遅れて陽暦換算し、「十一月四日」（二四一頁）手術としている（正確には陽暦十一月十八日となる）。

これを本作では、同じ嘉永二年だが十月に、「西国のさる大藩の殿様」が帰府する際、掛川「関」<sup>(4)</sup>の宿付近で右鞆丸が痒くなって軍鶏の卵ほどに脹れ、小田原「掛川」では雁の卵ほどになり、品川「小田原」では鷺鳥の卵ほどになった、とする。十二月二十八日江戸到着後も痛みが退かず、翌嘉永三年閏二月（但し、この年に閏月はない）八日に典医頭伊藤玄朴等の診断を仰ぎ、種々準備して十一月四日手術とした。すなわち、典拠で弘化四年頃から嘉永二年十一月までの約二年（ただし悪化した期間は約九カ月）だったのを、本作では嘉永二年十月から翌三年十一月までの約一年としている。嘉永二年江戸下向の道中で悪化した点は典拠と同じだが、悪化の度合は本作の方が急激である。また、下向の時期は典拠が一月なのに対し本作は十月であり、手術時期がちょうど一年後とされた。これは、典

抛とは相違して患者が「西国のさる大藩の殿様」であつたため、万が一にも失敗せぬよう蘭方医たちが十分に準備・研究する時間を設定し、彼等の苦心を強調するためである。

続いて本作では、嘉永二年十二月江戸に帰り着いた殿の悩みを紹介する「日記の一節」が紹介される。典拠「やまひの草紙追加 一名玉とり日記」には以下のようにあつた（対照のため、本作との主な異同に傍線を付す。以下同じ）。

同じ月二十八日に江戸にかへりつきにけり、道すからもいたみつゝ帰て後は、いとあゆむ事さへもわつらはしく成りてたれこめてのみありければ、またこゝにても多くのくすしにたつねて、くさ／＼よしといふ事のかきり尽したれと、日に日にたゞ大きうなりもてゆくにつけて、をり／＼いたみなやむ事さらにやむときなし、かゝるやまひなん終にそのいたむ所、はちすのはなのひらくことくゑみくつれてくさりゆけは、いのちいくへくもあらずといふを聞くにも、今はいくはくならずそのさかひにいたらんとおもへは、いとゝやすき心なし、（典拠一四三頁）

一方、「玉取物語」では以下の通り。

極月の二十八日に江戸へ帰りつきけり。道すがら痛みつゝ、帰て「ての」後は歩むことさへわづらはしく成りて「成り」垂れ籠めてのみありければ、「ありける。」多くの医師を招き、種々、よしといふことの限りをつくしたれど、ふぐり玉、日に日にたゞ大きうなりもて行くにつけて、折々、痛み悩むこと更にやむときなし。かかる病なん終にその痛むところ蓮の花の開くがごとく壊み崩れて腐り行けば、命幾日もあらずといふを聞くにも、今は幾許ならずそ

の界に至らんと思へば、いとど安き心なし。

傍線部が、漢字表記・送り仮名・濁点・句読点等を除いた異同であるが（以下同じ）、「いのちいくへくもあらず」（命生くべくもあらず）を「命幾日もあらず」に変え、殿様ゆえに医師を「招」いたとした以外は、読みやすさを図つた改変であろう。『うすゆき抄』収録時新たに加えられた改変も目立つ。なお、「同方会誌」五十七所収本文は「日に日に」を「日にけに」、「はちすのはな」を「はちすのは」とすることから、依拠本文とは言えない（後掲の引用箇所でも照合したが、やはり独自の異同があり、依拠本文ではない）。同様に、国立国会図書館蔵の早川憲『幽香叢書』（写本）巻九所収「やまひのさうし追加」原文も「日にけに」であり依拠本文ではない。

次に本作では、嘉永三年（一八五〇）閏二月、將軍家の幹旋により典医頭伊東玄朴と奥医者並大槻俊齋・戸塚静海らが診断したというが、伊東玄朴・戸塚静海が奥医者に任じられたのは、これ以後、將軍家定の病状が悪化した安政五年（一八五八）七月であつた（加藤友康等編『日本史総合年表』二〇〇一年五月吉川弘文館）。これは典拠に「後日將軍家の典医に上つた大家揃ひであるから、これ程豪華な手術は空前絶後といふも過言ではあるまい。」（一四七頁）とあるのをを用いたのであろう。しかし、前年の嘉永二年三月十五日、幕府は漢方医の要請に応じて、外科・眼科以外で蘭方を用いることを禁じており（前掲『日本史総合年表』、本作のように將軍家が蘭方医を診察に差し向けるはずもなかった。本作のように伊東玄朴らを「奥医者」として診察させるのであれば、安政五年七月以降にすべきであろう。これは、典医（奥医者）である伊東らに、失敗の許されない、

「西国のさる大藩の殿様」の外科手術を行わせようとした設定から生じた瑕疵であろう。

ここで伊東ら三名の名が出たのは、典拠「E嘉永年間の辜丸摘出手術」(二四二頁)に拠るもので、大槻を「江戸仕立」、戸塚を「長崎仕立」としたのも、前掲典拠Eの註(五)(一五〇頁)に「長崎仕立の『略』戸塚静海・伊東玄朴『略』」に対し、江戸仕立には、「略」大槻俊斎『略』等があつた。」に拠らう。

「殿」が詠んだ歌は、全集解題が指摘するように術前術後二種の歌の複合で、上五「身を責むる」のみ術前である。

「その頃の日記」の引用も、前述の典拠に続く個所である。すなわち、

さらはいかゝすへきと問ふにそのあしきたま切り捨る法はあれと、未だこゝにその術おこなひし事なければたやすからずと云ふ、されと、とてもかくても此まゝすぎ行くは、死ぬへき道にて立行くにて、立かへるへき期はあらぬをいかてその術おこなひてよ其の療するわさある事をきゝながら、たゞに死ぬるを待つこそをこならめ、その術ようせずは死なんのみ、さりとてまたいさゝかのいのちちゝむるまでにてついにくるしみなやむかきりを尽して死なんにまさりぬへしと、せちにこひていよ／＼切斷つ事とはなりぬ、

「玉取物語」では、さらば如何にすべきと問ふに、その悪しき玉を切り捨つる法はあれども、未だ我国にて行ひしことのなければ、容易からずと医師は言ふ也。されど、にもかくにも此のまま過ぎ行くは、死ぬべき道に出で立行くにて、立帰る期のあ

らざるを、いかでかその術を行ひてよ、療する術ある事「事」ナシ」を聞きながら、ただに死ぬる「死ぬ」を待つこそ鳥瀝ならめ、その術ようせずば死なんのみ、さりとて戦ひの命を縮むるまでにて、つひに苦しみ悩むかぎりをして死なんにまさりぬべしと、切に乞ふ心となりぬ。

前と同様、目的語や主語等を補つて読みやすくする改変がほとんどで、『うすゆき抄』収録時に加えられた改変は少ない。ただし、「たゞいさゝかの」(ただ些かの)を「戦ひの」としたため、手術によつて少しばかり(またはかりそめの)命が縮むだけ、という意味が、「身を責むる」の歌と呼応し病と戦つて命が縮む意となつた。また、「玉取物語」ではまだ手術を行うと決定していないため、「殿」の個人的決意に留まつている。それを受け、蘭方医たちが伊東玄朴宅に集まつて相談する。

「杉田玄白、前野良沢の『解体新書』が翻刻されてから七十年」たつたが(後には「七十と何年」ともある)、蘭方外科は未熟であり、「腫瘍のふぐり玉を切る技は、いかにも、『いかにも』ナシ」ばれいの術書に見えてゐるが、その処置は至つてむづかしいもののやうで、「その処置」以下該当箇所ナシ」というのは、典拠Eの「此の劃期的な大手術に就いて、吾人に想起せしむるものは前野良沢、杉田玄白等の腑分である。彼等が安永三年「一七七四」八月「解体新書」を著してより、実に七十五年の歳月が流れて居る。」(一四九頁)や「辜丸腫瘍摘出手術は文献上に現れて居るのみであつて前例なく、手術は至つて困難の旨を「豊城が」語り聴かされた。」(一四二頁)に拠らう(「ばれい」については後述)。

集まつた蘭方医のうち、「長崎仕立のはうでは伊東玄朴をは

じめとして、竹内玄洞、「本間玄調」、入沢貞意、戸塚静海、石井宗謙、江戸仕立のほうでは箕作阮甫、高須松寧、大槻俊斎、坪井信良、川本幸民など」だったが、これも典拠Eの註(五)

(一五〇頁)に「長崎仕立の竹内玄洞・戸塚静海・伊東玄朴・

入沢貞意・石井宗謙等に対し、江戸仕立には、箕作阮甫・高須松寧・大槻俊斎・坪井信良・川本幸民・牛塚良庵・呉黄石等があった。」(傍線須田。以下同じ)とあるのに拠る。初出に無い本間玄調は、後述する平凡社『大百科事典』「ランガク 蘭学」に、シーボルトの弟子(戸塚・竹内・伊東・石井等)を羅列する中で「常州の本間玄調」と見えたのを補ったのであろう。なお、全集解題では「高須松寧」を「高須松斎」の単純な誤植と見て訂正しているが、「松寧」は典拠通りで誤植とはいえない。高須松斎(一七八八〜一八六九)なら嘉永三年(一八五〇)当時六十三歳で、伊東玄朴・戸塚静海・箕作阮甫より十歳余り上である。字形の類似から言って、その養子高須松亭(一八一四〜一九〇二)が典拠で誤植されたのではないだろうか。伊東栄『伊東玄朴伝』(大正五年七月玄文社)にも、安政四年(一八五七)「種痘所建設の費用を醸出せる人名」に「箕作阮甫 竹内玄同 高須松亭 永田宗見 林洞海 大槻俊斎 三宅良斎 坪井信良」(略)(九三頁)と見え、縁が深かった。

「殿上の御腫物は良性でござつて、瘡毒「梅毒」にも、労性にも、癌腫にも、その方の悪性の筋をひいてゐない」も、典拠Eの「由来辜丸腫瘍として屢々挙げられるものに梅毒、癌及び結核等がある。」「略」豊城は此の手術後二十一年も延命して居る処を見れば、良性腫瘍であつた事は確である。」(一四九頁)に拠ろう。なお、当時の蘭方医学の流れを踏まえて「玉とり日

記」を検証した高澤博「ANECDOTA(28)——隠れた史実——」(『国立<sup>病院</sup>千葉医療センターニュース」42、二〇一〇年七月)は、「現在から<sup>推定</sup>すると、辜丸結核、奇形種、精上皮種の類の疾患か。」とする。

手術までの数ヶ月間、「殿のふぐり玉に殉死をねがふ」、すなわち手術の実験台になろうと申し出る藩士が続出するが、その名前も典拠の巻末索引から類似名を挙げることができる。すなわち、本作で挙げられた五名中、「杉浦三蔵」は典拠「杉浦愛蔵」と「岩田三蔵」に、「生島孫太」は「生島孫太郎」に、「多門孝平」は「神田孝平」と「多門季三郎」に、それぞれ依拠したものであろう。

さて、種々の研究・準備を経て十一月四日手術が決定されるが、場所が「下邸の中ノ書院」であるとか、戸塚以下四名が前日から泊まり込んで準備した等以外は典拠通りである。真中に量を五畳積み上げて白布で蔽い施術場所としたのも、典拠に「先おのを畳五帖斗かさねたるうへに仰向にねさせ」(一四四頁)とある。このやり方が「むかしから順天堂の一派がやつてゐた方式であつた」点も、「量を重ねて手術台に利用した事が見えるがこれは当時順天堂一派の常套手段である。」(一四七頁)との記述に拠っている。これが切腹の場に似ているとの苦情は、次の「御母堂」による横やりともども、身分ある「殿」の手術に対する周囲の過剰反応であり、本作独自の設定である。

本作末尾まで引用される、手術の経緯を記した「殿の日記」も、前掲二例と同じく、典拠に少し手を入れて読みやすくしたものである。すなわち、典拠では

先おのを畳五帖斗かさねたるうへに仰向にねさせて、や

かてその切る所見さためなとするなるへし、刀をとるもの戸塚静海を長にて、林洞海三宅良齋なり、伊東玄朴かたはらにありて、何くれとはからひ定む、大槻俊齋おのれが胸先を右の手してしかとおさへ、左の手に書を持て猶あやまちあらせしと心をくはるなりけり、竹内玄洞棄の事を司りてたゝおのれかかをみつゝ心ちいかに／＼ととひこゝろむ、玄朴のをしへ子二人、左右の足をおさへて動かさしめず、洞海のをしへ子ら水よ布よと役送す、かくてその手さたまりて良齋刀おろして、陰茎のわきよりふぐりの右のかたを五六寸もたちわりたりとか、おのか心には只冷水そゝくかとおもはれぬ、此ときうまの時の鐘きこえけり、それよりさてきりたる中をひらきて見さむるなるへし、をり／＼ひゝく事も有りけれど、さのみいたしとも堪へかたしとおおもはれず、をりをり水そゝき洗ふをはひや／＼と覚えられき、人々さま／＼にはからひて、精系をいにて結ひたるときは、命のかきりにやと思ふはかりにて、たゝ腹の中に物さし入るゝ心ちそせられける、ほとなく切すてたるにや、其心ちもとみになほりぬ、さてあしき玉とり出すとて、左右にまとひたる筋とも切るに、二たひ三たひはひゝきつれと、それしかなにはかりの事もなし、此たまぬき出たるこゝち年ころ明暮に心にかゝりてかた時わすれすおもひくつほれしそのねたちたるなれは、たとへんにものなくこゝろよくすかすかしくそおほえける、いまはさらに千とせのいのちつきたりと心もおちあたるけにや、疵口ぬひつくらふをり中々に堪へかたくて人々にもはらはれたりき、此ときまたく日暮たり、とり出したる玉をみるに少し

うらひらみて長き所四寸余り、はゝは三寸計にて所々たかひくありてそのかたちをうしなひ、裁わりてみるに、玉の性変していといたく色もみたれ、いまやくされ出へきまなり、おもさ百目あまり有りしとか、かくておのれは仰向のまゝにねよといはるゝに、けふの昼よりくれ過くるまでおさへられてうこされければ「ママ。幽香叢書」所収写本では「うこされされは」「りけ」を朱書で挿入し「うこされさりければ」と修正」、腰いたみてくるしけれど念してそのまゝかゆなと吸ふ、「六行略。家の女らに足をさすられなどして気分もよくなつたので歌を詠み、身動きが出来ないので終夜一睡もせず、翌五日に執刀医等の診察を受けた、などと記す」六日七日おなしこゝちなり、八日のひいかにしけむ尿の出あしく成りて、日に一たひ夜に一たひはかり出るに、いたくなやましければ、何ゆゑならんととひはかれとするよしなし、十日といふに成りてくすし洞海いさゝかはれ出て、ぬひたるいと引つめたるかありといひてきりすてたれば、またゝくまに心よく出てきにけり、これより後はなにのさはる事なくて、十五六日には食物のいましめもいさゝかゆりて、日々に力つきて十八九日には立居も心にまかするやうになりぬ、疵口も大かたにいえたにて、またかゆく覚ゆるに堪へかたければ、をり／＼湯もて洗ひものしつ今はたゝ日をかそへてまたくいえなん事を待つばかりになんありける、

「玉取物語」では、

まづおのれを畳五畳ばかり重ねた上に寝させたり。切るところを見定めんとするなるべし「切るところを見定めんと

するなるべし。まづ疊五疊ばかり重ねた上に寝させたり」。刀を執るものは戸塚静海を長として、林洞海、三宅良斎なり。伊東玄朴かたはらにありて、何くれとなく計らひ定む。大槻俊斎はおのれの胸をば右の手でしつかりとおさへつけ、左の手に蘭書を持ち、一寸の誤ちもあらせじと心を配るなりけり。竹内玄洞は菓のことを司れるが、おのれが顔を見つつ、心地いかにいかにと問ふなり。玄朴の教へ子二人、左右の足をおさへて動かさず。洞海の教へ子ら、水よ、布よ「水よ布よ、」と役送す。かくて刀をとりはじむ。／静海、刀をおろし、陰茎の脇、ふぐりの右の方を五六寸も截割りたりとか。おのれにはただ冷水を注ぐかと思はれぬ。この時、午の刻の鐘きこえけり。さて、今は切りたる中を開きて見定むるなるべし。時として身のうちに響くこともありけれど、左のみ痛しとも、堪へがたしとも思はれず。折々、水注ぎ洗ふが冷々と覚えらる。人々、さまざまに計らひて、精系を糸にて結びたるときは、命の限りとばかりにて、腹の中に物を差入れらる心地ぞせられける。ほどなく切捨てたるにや、その心地も直りぬ。／扱、あしき玉を取り出すとて、左右に纏ひたる筋を切るに、二度三度は響きつれど、なにばかりの事もなし。この玉ぬき出たる心地、明暮れ心にかかり、片時も忘れざりし根を断ちたるなれば「事もなし。明暮れ心にかかり、片時も忘れざりし根を断ち、玉をぬき出したるなれば」、たとへんにもなく清々しくおぼえける。今は更に、千歳の命、継ぎたりと、心の落居たるにや、疵口を縫ひつくらふ折、仲々、堪へがたくて人々に笑はれたりき。このとき全く日暮れた。／

とり出したる玉を見るに、少し裏平みて、長きところ五寸余り、幅は四寸ばかりにて、ところ／＼高低ありて形を失ひ、裁ち割て見るに、玉の性、変じていたく色も乱れ、いまや腐れ出づべきさまなり。重さ百匁余りもありしか。さもあれ、仰向けに寝よといはれ、昼より暮れ過ぎまで押へつけられ、動きもさへならざ「ざり」しこととて、腰痛みて苦しけれど、念じて、そのまま粥など吸ふ。／六日、七日、おなじ心地なり。八日の日、いかにしけむ、尿の出あしくなりて、日に一度、夜に一度ばかり出るに、いたく悩まし。十日になりて、洞海、思ひだして、縫ひたる糸の引詰まつたるがありと言ひて切捨てたれば、瞬く間に心地よく出てきにけり。これより後、なんの障る事なく、十五、六日には食物の戒もいささか緩り、疵口も大方癒着し、今はただ日を数へて、全く癒えなん事を待つばかりになんありける。

前二例と同様の微修正が多いが、「書」を「蘭書」と明確化し、「二寸の」誤ちもないように強調するとともに、摘出した丸を縦横それぞれ一寸ずつ大きくすること、より重篤な病状へと強調された。また、典拠では三宅良斎（ちなみに本作では三例いずれも「良斎」）執刀だが、その前の個所に「刀をとるもの戸塚静海を長にて」とあったのに合わせ、静海執刀に変更している。「うこかされければ」の意が不明瞭なためか、「動きもさへならざ「ざり」しこととて」と分かりやすく表現している。また、患部が腫れたため縫合した糸が邪魔をして尿が出にくくなったとする「いさゝかはれ出て」を、単に糸の引き詰まったのを洞海が「思ひだして」切ったとしている。末尾では、

立ち居ができるまでに回復し、また痒みを抑えるため湯で洗ったとあったが、これを省略することで引き締められた。なお、単行本との大きな異同は、文の順序を入れ替えることでより分かりやすくするためであろう。

さて、陪臣である山内豊城が蘭方の大家による手術を受けられたのは、文政五、六年（一八二二・三）頃に手習いに通った出石藩儒榛（榛沢）運平宅で、後に蘭方医として一家をなす佐藤泰然（一八〇四～七二）と昵懇になった縁による（典拠一二二～三頁、『順天堂史』「一九八〇年五月学校法人 順天堂」上三二頁）。その後、豊城の妻の妹が泰然と結婚し、豊城の次男と泰然の三女も結婚するなど、姻戚関係が結ばれていた（典拠一二三頁）。のち泰然は弘化元年（一八四四）下総国佐倉で蘭方塾順天堂を開き、特に外科に優れて幾多の手術を成功させ、佐倉藩の藩医に就任する。典拠で「勿論義弟佐藤泰然及びその娘婿林洞海等は主なる相談相手であった」（一四二頁）とあるように、泰然あつてこそその手術だったのだが、どういうわけか、外科を得意とする泰然はこの手術に加わっていない。

しかし、鈴木要吉『蘭学全盛時代と蘭疇の生涯』（昭和八年八月東京医事新誌局、披見本は同年九月再版）「七、卵巣水腫切開術」によれば、泰然自らが豊城の「辜丸の硬結腫」手術を執刀しており、その際「江戸の大家が聞伝へて佐藤の手術見学といふ訳で集つて来た。」

泰然は歴々を前に置いて腕を振ふので慎重なる態度を執つて、先づ静動脈神経等を糸を以つて緊縛した、処が山ノ内「豊城」が苦痛に堪え兼ねて卒倒してつた。／泰然は例の放胆な頬笑を以つて。／「これは幸ひだ、卒倒中は人事

不省であるし、出血も少く、全く痛みを感じる事もない、手術了つて若し蘇らなかつたなら、活かすもまた容易である。」／と悠々硬結剔抉にかゝつた、硬結を切り去つて陰囊中を洗滌する時山ノ内が覚醒して、／「卒倒中は痛みも感じなかつたが、創口を縫合する度、糸針の通るのが堪らなく辛い」／と訴へた位で、此手術も成績極めて良好で数日にして全治した。

典拠では、手術中、「精系をいにて結ひたるときは、命のかきりにやと思ふはかりにて、」と苦痛を訴える一方、その前は「をり／＼ひ／＼く事も有りけれど、さのみいたしとも堪へかたしともおもはれず、をりをり水そ／＼き洗ふをはひや／＼と覚えられき、」左右にまとひたる筋とも切るに、二たひ三たひはひ／＼きつれと、それしかなにはかりの事もなし、」と、余り痛みを感じていない。しかしその後、「疵口ぬひつくらふをり中々に堪へかたくて人々にもはらはれたりき、」と、縫合の際には苦痛を訴えている。これらと、泰然による上記手術記事との類似は否みがたい。典拠は豊城自身の手記であるから、あるいは、痛みの余り卒倒したことを恥じて隠したとも考えられるが、他に資料がないため、泰然執刀説は異説に留めたい。

以上、本作の典拠が『遣魯伝習生始末』であることを確認した。

## 二 『漫談明治初年』——西国の殿様——

主人公である「西国のさる大藩の殿様」のモデルは、「山内」という苗字の一致から、嘉永元年に襲封した土佐藩<sup>⑤</sup> 山内

豊信（容堂。一八二七〜七二）と考えられる。拙稿「ある姫君の物語——久生十蘭論V——」（二〇一〇年四月「国語と国文学」）で言及したように、この殿様が吝嗇の上狡猾だったとする部分は、同好史談会編『漫談明治初年』（昭和二年一月春陽堂）所収「明治初年の殿様」（よし町水戸屋隠居）における容堂の息子の話を取り入れたものである。すなわち、容堂の「御子様」が平清で芸者を呼んで騒いだ後、

「ウチャのー、あるいて帰りたいが、道が判らんでの——、其方が跡からついてまゐつて、間違つた方へまゐつたら、教へてくりや、一遍あるいて見たいでうのう」と仰（う）つて、到頭、後方（うしろ）から、見えがくれに御家来をつけさせて、仲町通りを、ゆらり／＼と、永代の方へ御帰りになつたことがあります。

お忍びで歩いて帰った物珍しい体験談を、本作では「帰りの駕籠代を惜しまれた」「締り屋」の話に変えたのである。「仲町通り」とは、深川の富岡門前仲町（現江東区富岡一丁目ノ門前仲町）の富岡八幡前にあつた平清（ひらひら）の前の通り。本作で「仲ノ町」としたのは、「下値（げぢ）の小格子（ここうし）で早乗打（はやのりうち）を遊ばされる」、すなわち下級遊女を相手に短時間で済ます殿様の吝嗇（きんさく）ぶりを示すために、新吉原の仲ノ町（現台東区千束四丁目辺）に改変したのであるが、深川の平清とは地理的に離れている上、そもそも江戸時代の新吉原で駕籠は使えない。

「明治初年の殿様」では、続いて、この「若様」が奉書紙に水引を掛けて「金何疋」と書いた御祝儀を芸者一同に与えたものの、開けてみると「まあ……タツタ……」と呆れるくらい少なかった、とある。この話も、本作で「金何百疋」と強調して

いる以外はそのまま用いられている。ただし、一匹は銭十文にあたり、明治四年の新貨条例公布後は金四百匹で一元（百銭）となる。従って、「金何疋」と書いた「明治初年の殿様」ならば、例えば金四匹で一銭となるため、「麗々しく書いた」割には確かに少ないと言えよう。しかし本作の「金何百疋」なら一元〜二元程度となり、ご祝儀として必ずしも少ないとは言えない。

なお、この「若様」とは容堂の長男豊尹（とよたか）（一八六六〜一九一二）と考えられる。容堂が隠居したのは安政六年（一八五九）で、三代前の藩主豊資（とよすけ）（一七九四〜一八七二）の十一男豊範（とよのり）（一八四六〜八六）が跡を継いだ。一方、豊尹は明治十二年（一八七九）に分家し、十七年男爵、二十四年子爵となる（以上、『昭和修訂 華族家系大成』下、一九八四年四月吉川弘文館）。田中重策編『日本現今人名辞典』（明治三十三年九月日本現今人名辞典発行所）に拠れば、豊尹は明治十九年一月から二十三年九月まで英国に留学していたから、「明治初年の殿様」の「その時分洋行から御帰りになつた××様といふ方」に符合する。時代的には明治二十四年前後の話であろう。

また、本作で容堂をモデルにしたこの「殿様」と締まり屋の三幅対にされた「浜町河岸に御殿のある因幡のさる殿様、小石川の第六天に上邸のある阿波のさる殿様」も、「明治初年の殿様」の「浜町河岸に御殿のあつた因州鳥取の殿様」「多分第六天の御近所に御邸があつた「略」阿波の殿様」に拠っている。

### 三 『大百科事典』——ペダントリーのありか——

これまで拙論で度々指摘してきたように、平凡社『大百科事典』<sup>(1)</sup>は久生十蘭の重要な知識源であった。<sup>(2)</sup>本作でも医学・文学関係で数多く利用され、知的奥行きをもたらしている。

まず、典拠「やまひの草紙追加 一名玉とり日記 冒頭で「疾の草紙といふ画巻あり、奇病を画き集めたるものなり、土佐光信の筆と言伝ふ。」を踏まえ、本作では「殿」の病との関連で「病草紙」といふ絵巻物」の詳細が説明される。すなわち、

鼻頭の黒き男、眠られぬ女、風病の男、小舌のある男、肝門のない男、また数ある男、男女両性の人、頭のある男、法師、息の臭い女など十五段に白描の写しを合せ、十六段一卷となつてゐる。他に侏儒と背高男の掛軸、鶏に眼を突つかせる女、悪夢に襲はれる男の三図がござる。「餓鬼草紙」「地獄草紙」と同じく詞は寂蓮、<sup>(3)</sup>絵は土佐光長の筆と言伝へられてゐる。世に厭はしき病気の数々を描き列ねたは、人間の病苦や六道三世の因果の理を示したものであらうが、「か。」

は、『大百科事典』「ヤマイノソーシ 病草紙」に拠っている。すなわち、

絵巻物。名古屋関戸守彦蔵一卷。鼻頭の黒き男、不眠症の女、風病の男、小舌のある男、肝門のない男、男女両性の人、目のかすむ男、歯の揺ぐ男、肝門の数多ある男、毛虱に苦しむ男、霍乱の女、「画入り」頭のある男、法師、息の臭い女、居眠りする男、顔にあざある女の十五段に白子の摸写図を併せて十六段一卷をなしてをり、他に掛軸で侏儒と背中高き男の二段が同家に蔵されてゐる。この外では、原富太郎蔵白子、益田男爵蔵雑に眼をつつかせる女、

村山龍平蔵悪夢に襲はれる男の三図が知られてゐる。『餓鬼草紙』や『地獄草紙』と等しく詞は寂蓮、絵は土佐光長の筆と伝へられてゐるが、これもまた明かでない。「略」世に厭はしき病気の数々を画き列ねて醜悪の態を現はしてゐるところに、また興味のほどが窺はれるのみならず、人間の病相といふが如きはまた自ら六道や三世因果の思想を背景としてゐるものと思はれ、「略」『地獄』『餓鬼』『病』の三草紙の如きは六道絵として互に関連する製作であらうとの説も出てゐる。

本作では、「六道絵」に通じてゐる御側医者山添椿庵でも殿のような「病相」を見掛けたことがなかったとすることで、特異な病であることが強調される。なお、「白子」(アルビノ)を本作が「白描」(墨一色による線描)と改めた理由は不明。

次に、「ぶぐり玉」については「たあへるあなとみあ」と、ぐえさりうすの「解剖学」に精細に記述されてゐる。」とされ、次のように説明される。

即ちそれは扁平、楕円形の肉質であつて、内面、外面、上端、下端、前縁、後縁を有つ。重さ、大約して十五グラム、長さ一寸三分位、幅一寸、厚さは七分ほど也。縦軸は外前方に向ひ、左のぶぐり玉は右よりも少々低位にあるが通例なり。ぶぐり玉の表は軟く平滑なる白色の膜にして、その下に血管膜と縦横の中隔に隔てらるる数多の小葉「葉」あり。小葉を充すは直細精管にして、一端は盲端に終り、他端は縦隔中にて「縦隔中」に吻合して網状となる、とある。これも、『大百科事典』「コーガン 辜丸」(図入り)冒頭部

で、

扁平橢円形にして、内面、外面、上端、下端、前縁、後縁を持つ。重量約一五グラム、長さ四糎、幅三糎、厚さ二糎。縦軸は外前方に向く。通常左辜丸は右よりも低い。辜丸の表面は強靱にして平滑なる白膜にして、その下に血管膜がある。白膜は後縁から実質中に侵入し、辜丸縦隔となり、縦隔より内方に向ひ放射状の辜丸小中隔を送り、辜丸実質を多数の辜丸小葉に分ける。小葉は長円錐形にして、尖端を縦隔に、底を周囲に向ける。小葉を充すは曲細精管にして、一端は盲端に終り、他端は直走する直細精管となつて縦隔中にて互に吻合し、辜丸網を造る。

とある傍線部に基づき、幕末という時代に合わせ尺貫法に変えている。なお、「うえさりうすの「解剖学」も、『大百科事典』「オランダイホー 和蘭医方」に、「当時西欧医学は、千数百年の久しき間斯界を占擅したガレーンの旧套を蟬脱して、先づヴェサリウス *Andreas Vesalius* によつて正しき解剖学の成書が刊行され（一五四三）」や、同「イシ 医史」の「ブルッセル生れのヴェサリウス（一五一四—一五六四）は、古来のガレーヌ解剖学の誤謬を指摘して」などを用いたものであらう。「解剖学」とは「ファブリカ」、すなわち *De humani corporis fabrica libri septem*（人体の構造に関する七つの本）のことである。ちなみに、「たあへるあなとみあ」の翻訳「解体新書」巻四「陰器篇第二十六」（大正三年一月国書刊行会「文明源流叢書」第二所収）には上記の記述がない。

次いで本作では、「ふぐり玉の腫瘍」について解説される。すなわち、

瘡毒、癌腫による悪性のもの、高熱、外傷による良性のも

のとの別があり、猶また局所の肥大には纖維腫、液腫、軟骨腫、骨腫、筋腫に分けられるが、無痛のものにあつては、癌腫の疑ひを残すが多く、また良性の肉腫に於ても漸次大を増して小児頭大〔小児頭大〕に達し、精系に進入して悪性腫瘍に転位するもの故、有痛無痛に関らず、肥大の形勢にあるものは、可相成〔可相成〕は速かに摘出するがよいとある。

これも、『大百科事典』「辜丸」の「辜丸の病氣及び異常」に拠っている。すなわち、

〔辜丸腫瘍〕「略」辜丸腫瘍には良性腫瘍と悪性腫瘍とがある。良性辜丸腫瘍の主なるものは纖維腫、粘液腫、軟骨腫、骨腫、筋腫等であるが、その発生は稀であり、臨床上には大した意味を有たぬ。これに反して悪性腫瘍としての癌腫、肉腫は屢々来るもので、「略」。（イ）辜丸癌腫「略」先づ腫瘍の発生と共に辜丸が比較的速に無痛性に腫大すると共に、「略」。出来得るだけ早期に診断を下して辜丸摘出術を行ふと同時に、「略」。（ロ）辜丸肉腫「略」初めは徐々に辜丸が無痛性に増大するため、「略」後には急にその大きさを増し、手拳大乃至小児頭大に達するものもある。

〔略〕遂には副辜丸、精系に侵入し、「略」所謂悪性辜丸菌腫の状を呈す。〔略〕。／「辜丸炎」〔略〕辜丸実質の炎症で、辜丸は腫大し、疼痛を訴へ且つ発熱を伴ふ。〔略〕症状としては辜丸は略と鷄卵大に腫大し、「略」。／「辜丸微毒」〔略〕微毒は結核と異なり好んで辜丸を侵し、「略」

一側または両側の辜丸が雞卵大乃至梨大に腫大し、対比すると、本作で纖維腫以下を良性腫瘍としていないこと、

肉腫を良性としていること、それが精系に進入すると悪性に転位することなどは『大百科事典』と相違するが、全体としてこれに基づくことは明らかであろう。本作で、痛みも無いのに急激に腫脹した殿の腫瘍は、『大百科事典』によれば悪性の「辜丸癌腫」「辜丸肉腫」の疑いが強くなり、典拠及び本作の「良性」と相違するため、こうした修正をしたのであろう。なお、本作で、その月（嘉永三年閏二月）末に腫瘍が「成人の拳ほどの大きさに生長」したとの記述も、上記「辜丸肉腫」の「手拳大」を用いたものであろう。また、本作で腫瘍の大きさを軍鶏・雁・鶯鳥・鶯・鶴それぞれの卵に擬えるのも、典拠「やまひの草紙追加 一名玉とり日記」で「こそ「去年」の秋は雁の子はかりになりて、」や、上記「辜丸炎」中、急性の転移性辜丸炎では「略と鶯卵大に腫大し」、また「辜丸黴毒」中の「雞卵大」「略」に腫大し」等からヒントを得たのであろう。

手術を決定した殿の要請を受け、伊東玄朴宅に集まった蘭方医たちは摘出の外科方を相談する。しかし、

蘭方は内科ばかりで外科はない。外科の名目はあるが、膏薬と塗薬のほか何事も得出来ず、蘭方の外科は、何としたものであらうぞと、漢方医の笑ひものになつて居たことであつた。外科学の教本としては、慶安二年に檜林鎮山が翻刻したばれいの蘭訳があるが、脈を引き、舌の色を見てすませる内科とは訳がちがひ、生きた人間の身の内に切尖を入れる難儀な術でござるゆゑ、手引草だけでは事が運ばなんでも道理であつた。腫瘍のふぐり玉を切取る技は、いかにも、ばれいの術書に見えてゐるが、その処置は至つてむづかしいもののやうで、余程の手練（てねれ）が行ふのでなければ、

十の八つは仕損ふげなを書いてある。

「蘭方外科は名目ばかりで、膏薬と塗薬のほか何事も得出来ず、華岡流の外科も脱疽、疔瘡（ぢやうそう）の手術を行ふ底のところ止つてゐる。腫瘍のふぐり玉を切取る技は、ばれいの術書に見えてゐるが、鎖肛、鎖陰を開切するのと事がちがひ、男の大事な箇所へ切尖を入れる難儀な術でござるゆゑ、手引書だけでは事が運ばなんでも道理であつた。」

ここで、蘭方に外科がないというのは、『大百科事典』『和蘭医方』の、「蓋し南蛮医術にせよ、和蘭医術にせよ、その主なものは外科であつた」や同「ガカガク 外科学」の「我國に於ける西洋式外科の發達は、慶長十六年（一六一一）長崎にオランダ流外科が輸入せられたのに始まる。」とは正反對の記述である。嘉永二年三月蘭方が禁じられた際も外科と眼科は例外とされたように（前述）、蘭方の特長はむしろ外科にあつた。富士川游『日本医学史 決定版』（昭和十六年四月日新書院）第八章「江戸時代ノ医学」「和蘭流外科」にも、「和蘭医方ニアリテ、先ヅ挙グベキハ、解剖学及ビ生理学ニシテ、」（三〇二頁）「而シテ當時世人ハソノ『和蘭流外科』術ノ新奇ナルヲ喜ビ、『略』和蘭医方ヲ伝習スルモノ甚ダ多ク、遂ニ檜林・西・『略』等ノ通詞ハ、各々一門戸ヲ張り、所謂和蘭流外科ヲ標榜シテ各個流派ヲ別ツニイタレリ。」（三〇三―四頁）とある。本作で、実情と正反對の設定にした意味は後述する。

続く檜林鎮山については、『大百科事典』『和蘭医方』の「和蘭流外科の頭領たる檜林鎮山が、元禄年間に蘭医から伝来したといふ秘蔵の外科書が、一六四九年（慶安二年）に刊行されたパレーの和蘭訳であつた」に拠る。ただしこれは、一六四九年

オランダ語訳されたパレーの外科書を、檜林鎮山が元禄年間（一六八八〜一七〇四）に蘭医を通じて入手し秘蔵していた、という意味である<sup>（九）</sup>。本作で、「ばれい」の著書を慶安二年に檜林鎮山が翻訳刊行したように記すのは、久生十蘭の誤解であろう。「アンブロアス・パレー Ambrois Paré (1510-1590) 出で近代外科学の開祖となり、（『大百科事典』『和蘭医方』）、「フランスマレー（一五一七―一五九〇）は銃傷療法の改良、血管結紮法の完成によりて外科学上に不朽の名をのこした。」（同「医史」とある）。

なお、『うすゆき抄』収録時に付加された「華岡流の外科」も、『大百科事典』『ハナオカセイシュ 華岡青洲』の「華岡流外科の名を海内に轟かし、「略」。麻醉剤として曼陀羅華の煎剤を案出し、鎖肛、鎖陰、尿道結石、乳癌、脱疽、痔漏、兔脣等の手術を行つた」云々に拠るう。

次に本作では、「去勢術に関する医書」で「牛馬の辜丸または卵巣を割去する術を詳述したもの」に基づいて実検を行つたが、「止血の方法がうまくいかず、とりわけ性器の完成した壮年の牛馬は夥しく出血して倒れてしまふ。灼切り法といふのも試みたが、施術後の保定にも不確なところがあるゆゑか、幼年の孱弱なものは一匹も助からなかつた。」そのため、万全を期すべく戸塚静海に尋ねた所、「かすとりちおんの医書には、去勢の術は寒暑の候はいづれも不可。春、秋、殊に早春がよいとあつた。これは牛馬のことで、「略」なんといつても施術の器具が思ふやうでなく、消毒の方法も不備だから、感染の恐れが少ない季節を選ばたい。」と答えたところがあるが、これも『大百科事典』『ギョセイ 去勢』に拠っている。すなわち、

去勢 Kastration [新装分冊版 「Castration」] 「略」。／〔男性去勢〕辜丸及び副辜丸の結核症、悪性腫瘍、重症損傷、化膿、壞疽等ある場合に行はれる。外科的手術による去勢術は一名辜丸剔除術といふ。一側辜丸剔除後には男子の二次的性徴には何等変化を見ないが、両側辜丸剔除後には次第にこれを失ふ。「略」／〔家畜の去勢〕辜丸または卵巣の割去をいふ。「略」余り幼年では体が孱弱で手術に耐へぬし、壮年に達しては生殖器が完成するために出血等で倒れる懼があるばかりでなく、「略」。季節は寒暑の候は何れも不可で春秋、殊に早春がよい。手術器具の準備と消毒に注意し、保定を確実に行はぬと却つて家畜が騒いで自ら出血を多くするやうな場合がある。去勢の方法には種々あるが、「略」。直接法には「略」灼截式、結紮式があり、止血法には「略」。消毒不十分な時または暑気の強き時に術後往々続発性の疾病を起すことがある。

本作末尾で、まだ嫡子のいない殿が手術を行つても問題ないか心配する奥方や母堂に対し、「一個をもつて二個の役を果すべき証跡」を申し上げる場面は、一方の辜丸を摘出して二次的性徴が変化しないとの上記記述に拠るだろう。

それでも不安を隠せない母堂が手術取りやめを言い出したため、困つた大槻は、母堂が国学に造詣の深いのに付け込み、「万葉集の巻ノ七に、伊勢の海のおまの志摩津が鮑玉、取りて後ものが恋の繁けんといふ和歌」の意について、「鮑玉の一方が残つて居れば、いつでも想ふ人の子を孕むことができるといふ、その心をうたつたもの」であると、古歌に事寄せて母堂を「欺してしまふ」。こうした文学関係の知識も、『大百科事典』『アマ

海人・海士・海女・蟹・蟹婦」(「志摩の海女」)の、

三重県志摩、度会郡一帯には可なり古くから海女の生活が初つてゐる。『万葉集』巻七には、「いせの海の、あまのしまつがあはびたま、とりてのちもが恋のしげけん」とあるが、志摩人はその地形上、昔より、男女とも海産物の採取に従事し、いはゆる志摩の海士として全国的にその名が高い。現在では、鮑よりも、真珠貝をとるものが殖える傾向である。[略]\*真珠・海人塚

及び「真珠」「真珠の歴史」の、

我国は海産物に恵まれた国であり殊にアコヤ貝、アハビ貝の分布は広く且つ多く生産し、その肉を好んだ故に自然太古より真珠を獲ること多くために貴重されてゐた。『古事記』『日本書紀』『万葉集』に真珠のことがかなり多く現はれてをり、『万葉集』巻七に「伊勢海之白水郎之島津我鰻珠取而後毛恋之将繁」とあるを『古今和歌六帖』には「伊勢の海の手士のしわざのあこやだもとりて後もか恋のしげけん」とあり、明かに伊勢志摩地方のあこや珠をいつてゐる。

に拠つてゐる。

十。

この万葉集一三三番歌の第四句は「取而後毛可」と読み、「伊勢の海の手士の島津の真珠は、手に入れた後もやはり恋しさは頻りであろうか。」の意(『新日本古典文学大系 萬葉集二』二〇〇〇年十一月岩波書店。「も」「か」はそれぞれ詠嘆・疑問を表す係助詞)。「譬喩歌」「寄玉」十一首中の一で、真珠のような恋しい女性と共に暮らすようになって、さらに恋しさが募ることを喩えた歌である。

しかし本作では、「志摩の海女」の記載通り「取りて後もが」と願望を表す終助詞に変え、後半の歌意を「(鮑玉を)取つた後であればいいなあ。(そうすれば)さらに恋しさが募るだろう」としている。

大槻に拠れば、件の歌は

一般には、藤原ノ淡海公と志摩の玉取りの故事を読んだものと言ふことになつて居りまするが、わたくしどもは、あれを医学の歌だとして居ります。あまとあるは、海に潜る海女にてはなく、古は海辺の遊女の異名であつた蟹を指したもので「略」往古は陸路の便が少く、旅行はおほむね海路によりましたが、旅人の鬱を散ずるため、港々に蟹といふ遊女が居つて、船が港へ入ると、小舟に乗り、あるひは岸に立つて客を招んだよしでございます。伊勢の海の歌にある鮑玉とは、玉の意ではなく、「玉の意ではなく、」ナシ」人間の精髓のことで、男にあつては鰻玉、女にあつては鮑玉。その頃、蟹を抱へまするとき、前もつて一方の鮑玉を切取る例がござつたが、蟹どもにしては、鮑玉の一方が残つて居れば、いつでも想ふ人の子を孕むことができるといふ、その心をうたつたものと解して居ります。

この解釈の前半は、『大百科事典』「アマ 海士・海人」の

(一) 能の謡曲。「略」藤原房前（藤原）の大臣は、父淡海公が讃州志渡浦の海士と契つて生れた子なる由を侍臣から聞き、亡き母の十三年忌に家臣を伴つて志渡浦に至り、追善の回向をすると、海士の姿をした母の霊が現はれて、昔の身上語りから、海中に入つて龍神から宝珠を取り上げた始終を舞つて見せ、やがて龍女と成り、孝子の供養をうけて成仏

するといふ筋。(二) 因みに、右の海人の玉取りの伝説を脚色せるものに、なほ幸若の舞曲及び古浄瑠璃に『大職冠』あり、

と、同「アマ 海人」の、

遊女の異名。また簪とも書く。往古は陸路の便少なく、旅行は多く海路を船に依つたものである。従つて、長い航海中の鬱を散ずるために、船が港に這入ると、多くの遊女は、或は船に乗り、或は海岸に立つて、客を呼んだものである。を組み合わせたものであらう。男性の「玉取り」から謡曲、さらに志摩の海女の真珠取りを連想し、万葉集の歌と絡める。同音の「簪」から遊女へ、その恋と「鮑玉」の取り合わせから、「取りて」を男女それぞれの持つ「人間の精髓」、すなわち「鮑玉」「鮑玉」の一つを切り取ると解釈したのだが、「志摩の玉取り」の故事を読んだものはまだしも、「伊勢の海の歌にある鮑玉とは、玉の意ではなく、人間の精髓のことで、」以下はこじつけに過ぎる。

まず、謡曲では讃岐国「志渡浦」が舞台であり、志摩ではない。また、当該歌の「あま」を海女ではなく遊女の意とした上で、男性の率丸同様、女性にも二つの「鮑玉」があるとするが、それが何を指すか、明らかでない(強いて推せば卵巣か)。加えて、簪を抱える際なぜ「一方の鮑玉を切る」のかも不明。百歩譲つてこれらを受け入れるにせよ、なぜ鮑玉を一つ切り取った方が恋しさが募るのかわからない。もちろん、恋しさが募るゝ妊娠とは限らない。

しかし母堂は、なまじ国学に素養のあるだけ、万葉歌をめぐる医者のもとしやかな解釈で煙に巻かれ、手術を許してしま

う。

なお、謡曲「海士」、志摩という場所、船や海岸で客を呼ぶ遊女というモチーフは、泉鏡花「歌行燈」(明治四十三年一月「新小説」)を想起させる。じつさい、拙稿「久生十蘭と泉鏡花」(二〇一〇年七月国書刊行会『定本久生十蘭全集』月報7所収)、前掲『鈴木主水』における忠義と私情(注(30))で指摘したように、久生十蘭は「歌行燈」を含む鏡花作品を愛読していた。父宗山の自殺後、継母に鳥羽の廓に売られたお三重が、船頭衆への売春を拒んだため、若い衆から謡曲そのままに縄を付けられ、何度も海中深く沈められる設定は、本作の「志摩の玉取り」と重なるとも説める。

#### 四 『おらんだ正月』——蘭学と医学——

本作が大きく依拠したのは『遣魯伝習生始末』『大百科事典』であったが、江戸時代の科学者五十二名の伝記を平易に記述した森銃三『おらんだ正月』(日本の科学者達)(昭和十三年八月富山房百科文庫)に拠った箇所も散見される。

まず、本作では伊東玄朴の住所を「下谷御徒町和泉橋通り」とするが、『遣魯伝習生始末』では「天保四年江戸和泉橋通御徒士町に医業を開く、」(「C少年の頃」註(三)、一三一頁)とあって、これに拠ったとも考えられる。しかし、『おらんだ正月』五二「農家から出て幕府の奥医師になった伊東玄朴」に、「天保四年には玄朴はまた下谷御徒町和泉橋通に、「略」大きな家を建てて、そこへ越しました。」とあり、こちらの方が近い。

第二に、本作では「解体新書」の後、「内科撰要」「医範提綱〔綱〕」が出たとされる。これは、『大百科事典』『蘭学』で、前野良沢、杉田玄白に学んだ大槻玄沢（磐水）門下の「作州津山藩医宇田川玄随は『内科選要』を編述し、伊勢の人安岡玄真（のち宇田川玄真）は『医範提綱』を著はして」に拠ったとも考えられるが、用字が「撰」「選」で相違する。しかし、『おらんだ正月』三二「ロシア人までその名を知つてゐた桂川甫周」、三四「オランダ流の内科を興した宇田川槐園と同榛斎」では本作同様「内科撰要」と表記される。後者には「医範提綱」の名も見え、外科だけでなく内科の知識も移入されたことがわかる。また、榛斎から「教を受ける者はいつも数百人にも及んでゐ」たとあり、本作の「蘭方医、おほよそ三百人」の参考にされたかもしれない。

第三、前述のように、本作で「蘭方は内科ばかりで外科はない。外科の名目はあるが、膏薬と塗薬のほか何事も得出来ず、」は事実反していた。しかし、『おらんだ正月』三五「蘭学を扱めた大功労者大槻磐水」には、明和四年（一七六七）ころの「オランダ流の医術といひますのは、たゞ膏薬や油薬などを使つて外科の治療をするだけのこと、」[略]「至つて覚つたかないものでした。」[わが国でオランダ流といつてゐるのは、外科ばかりで内科がない。][略]オランダ医者といへば、膏薬油薬の治療ばかりしてゐる」とあり、本作と類似する（油薬とは軟膏・塗薬のこと）。本作の「蘭方は内科ばかりで外科はない。」は、『おらんだ正月』の「外科ばかりで内科がない。」を逆転させたものであろう。すなわち、蘭方は確かに外科を特長とはするものの、明和四年ころの状況は膏薬・油薬を使う初歩的な療治

に過ぎなかった。そうした中、大槻磐水が『蘭学階梯』（天明八年〔一七八八〕）『重訂解体新書』（寛政十年〔一七九八〕）ほぼ成）等により蘭学を広め、多くの弟子を育てたため、外科・内科双方の知見が蓄積され、嘉永二年の鞆丸摘出術に至つたのである。本作ではこうした経緯を記さず、逆に蘭方を内科ばかりとすることで、鞆丸摘出手術に苦心惨憺する伊東玄朴たちの姿を浮き彫りにしたのであろう。なお、本書の標題「おらんだ正月」とは、大槻磐水が、寛政六年閏十一月十一日を陽暦一七九五年元旦として祝つた故事によるもので、この章は本書の要であつた。

第四に、本作では、内臓が人間とよく似てゐるとの説から、嚙を解剖用資料に使用してゐた山脇東洋が、実際に人間を解剖してみると「嚙の内臓は、人間の内臓とは似てもつかぬものだといふこと」「似てもつかぬこと」を知り、宝暦のむかし「臓志」といふ医書」で明らかにした、とされる。『おらんだ正月』一五「わが国で始めて人体を解剖した山脇東洋」には、東洋が宝暦四年（一七五四）人体解剖に立ち会い、「嚙の内臓が決して人間の内臓に似てゐないこと」を知り、後に「臓志といふ書物」を著したと記す。表現の類似性や、「臓志」を「臓志」と誤つてゐる共通点から見て、『おらんだ正月』に拠つたと考えられる（110）。

## 五 滑稽と真摯

以上、本作の材源として四種の文献を挙げ、撰取の実態を跡づけた。これらは本作のかなりの部分を占めているにも関わら

ず、切り貼りの痕跡を感じさせない。渾然たる文章に感服のほかは無い。

最後に、本作の特質を検討したい。

まず挙げるべきは、本稿冒頭で向井の指摘した「警拔で豊かなユーモア」であろう。これは、腫瘍という深刻な病にも関わらずその部位が「ふぐり」であること、身分の高い「大藩の殿様」が陰部の猛烈な痒みに心気悩乱すること、「ふぐり」の病態や手術の経緯が流麗な雅文体で日記に記されることなど、種々のギャップから生まれる。殿様の苦悩が深刻であればあるほど、無関係の読者には可笑しく感じられるのである。特に、腫瘍を「こやつめが、こやつめが」と擬人化して憎むものの、何とも致し方なく、ついに摘出を決意して、「身を責むる讐をば斬りつ更にまだ「また」よき敵もかな「がな」組打ちにせむ」と詠み上げる大仰さや、「おれをば、ふぐり玉の下敷にして殺す気かのう」と荒れるさまなど、こと「ふぐり」だけに何とも可笑しい。また、「殿のふぐり玉に殉死をねがふ」、すなわち手術の実験台になろうと申し出る藩士が続出する件も、もちろん藩士たちは大真面目なのだろうが、「いちど出したふぐりが、たやすくひつこまされるか」など、その真剣さと、辜丸「殉死」願いとギャップがユーモラスである。さらに、手術に反対した母堂が珍妙な和歌の解釈で誤魔化される滑稽さも逸しがたい。加えて、「嘉永のはじめ嘉永二年十月二のことごとくざつた。」と始まり、「その次第は、殿の日記に見えてゐる。」と閉じられる、時代がかった文体（途中やや平易になるが）も、上記内容とのギャップを際立たせる。要するに、「大藩の殿様」に行われた本邦初の外科手術をしかつめらしく語っているが、それが「ふ

ぐり」であるということでも可笑しさが際立つのである。本作より約二百年前、風来山人の物した戯文「瘻陰ろういん隠逸伝」（明和五年「一七六八」自序）を想起させるような素材・発想と言うべきであろう。

しかし同時に、初めての辜丸摘出手術に挑んだ伊東玄朴以下蘭方医たちの苦心も忘れてはならない。特に、「蘭方は内科ばかりで外科はない」という、現実とは逆の前提とすることで、蘭方医たちが『解体新書』以降外科の施術から「うまいこと逃げ」、「施術「解剖」の技さへ心得てゐれば、みすみす助けられる命を、おのれの卑怯と怠慢から、「略」見捨て「見捨てて」来た」と伊東玄朴が皆の前で反省する場面は、本作独自の設定である。「人間の貴い命を預る医者いしやの精神」に照らし「恥入った。赤面背汗のいたり」との反省を玄朴と共有した蘭方医たちは一致協力、種々の困難を克服し、「殿の日記」に記されたように手術を成功へと導く。ここに本作の主題があつたといえよう。困難を排して関係者を団結させ、成功に導くリーダー像は、数ヶ月後、『漂流記（昭和二十七年一月「小説公園」、のち『うすゆき抄』に「重吉漂流紀聞」と改題収録）の船頭重吉、「藤九郎の島」（同年九月「オール読物」）の船頭左太夫に結実する

殿の病をめぐる可笑しさに目を奪われがちだが、蘭方医たちの真摯な姿こそ本作の眼目と言つてよいだろう。

〔注〕

（一）拙稿『鈴木主水』における忠義と私情——久生十蘭論VI——  
（二〇一五年七月「国語国文」）参照。

(二) 初出は洗雲莊「玉とりの日記——わが国最初の寧丸摘出手術の記録——」(昭和十四年三月「科学知識」)。のち、昭和十六年六月「日本歯科評論」の「歯界春秋」欄に転載。

(三) 以下、本文は初出に拠り、「」内に単行本『うすゆき抄』収録本文との主な異同を示す。なお、掛川は現静岡岡部掛川市、関は現三重県亀山市。

(四) 本作では、陰毛を頂いたふぐりを「張継が「楓橋夜泊」の寒山拾得の顔にその儘」と形容するが、すでに「内地へよろしく」の「流木」二(昭和十九年七月二日「週刊毎日」第二十三卷第二十六号)でも、山吉船長の部下二人について「張継の「楓橋夜泊」からぬけだしてきた寒山拾得といった風体」としていた。「風流旅情記」(昭和二十五年八月「小説と読物」)でもカムローについて同様の設定がなされている。これは、有名な漢詩「楓橋夜泊」に寒山拾得の絵姿を配した屏風絵のことだが、本作の見立ての方が奇抜である。

(五) 石高二十万二六〇〇石余(通俗には二十四万石)。ただし、新田開墾により幕末維新の頃は四十九万四千石余あった(一九八五年二月吉川弘文館『国史大辞典』「高知藩」)。

(六) 明治三十九年九月廃業(同年九月二日「東京朝日新聞」五面に廃業広告あり)。

(七) 元版昭和六年十一月～十年十月刊、新装分冊版同十一年十一月～十四年四月。以下、引用は元版により、新装分冊版との異同を注記した。

(八) 拙稿『母子像』の内と外——久生十蘭II——(一九九三年七月「光華日本文学」)以下参照。

(九) 古賀十二郎『西洋医学伝来史』(昭和十七年十二月日新書院)「檜

林鎮山とその紅夷外科宗伝」でも、「紅夷外科宗伝は、仏蘭西の大医アンブロシウス・パアレの外科書に依拠し、貝原益軒の序文にもある通り、来船紅毛医師たちの伝授をも参酌し、之に加ふに、実験に基づける自得の説を以てし、「略」翻訳と云ふよりも、寧ろ依拠せるものと謂ふべく、著述と称すべきものであらう。【略】檜林鎮山が、紅夷外科宗伝を著すにあたりて用ひたアンブロシウス・パアレの外科書と云ふのは、Ambrosius Paré(Ambroise Paré)の外科書をCarolus Batusの蘭訳せるDe Chirurgie ende Opera van alle de Werken van Mr. Ambrosius Paré(一六四九年)(Dordrecht)と題するもので、一冊にて、九百二十八頁を以て終つてゐる。この西書は、明治二十四年の夏の頃まで、檜林家に代々伝へてゐた。(一三九頁)とする。富士川游『日本医学史 決定版』(前掲)「檜林流外科」(三〇四頁)も同様。

(十) すでに、「内地へよろしく」「引鶴」(昭和十九年十月二十九日「週刊毎日」第二十三卷第四十三号)末尾でも、「万葉集卷九の和歌」として「伊勢の海の、海士のしまつが鮑たま、とりて後もか恋のしげけん」と引用。

(十一) 附言すれば、「亜墨利加討」(昭和十八年一月「講談倶楽部」)「二つの戦争」一で、高柳鉄太郎と赤石八助の合奏が「池心を流れ、根岸の森にこだまして雲も動くかと思はれた。」も、「歌行燈」末尾で、辺見雪叟の小鼓、恩地源三郎・喜多八の謡、お三重の舞に桑名の海や川波も調子を合わせ、多度山など周囲の山々も客座に並ぶ気配があつた、と自然と人々が一体化する至芸の極致を踏まえたものだろう。

(十二) この話は『蔵志』(宝暦九年「二七五九」刊)冒頭に見える有名なもので、東洋は師後藤養庵の「余嘗て聞く、其の蔵は人に

肖ると。」(『日本科学古典全書』八所収「藏志」昭和二十三年五月朝日新聞社。以下同じ)に従い「獺を解きて観」だが、実際に人体を解剖すると「何ぞ獺の藏に肖んや。」というありさまだった。通俗教育研究会『<sup>通称</sup>逸話文庫 学者の巻』(明治四十四年十二月大倉書店)、「山脇東洋」人体を解剖して藏志を著す、富士川游『日本医学史 決定版』(前掲)「解剖学」「山脇東洋」等にも見える。

(十三) 拙稿「漂流、無人島、楽園幻想——久生十蘭論Ⅳ——」(二〇〇八年五月『説話論集』十七所収、清文堂)参照。

#### 〔付記〕

引用文は初出に拠り、常用漢字に改め、適宜ルビを略した。「」内は須田による注記、「／」は改行を示す。なお、本稿は二〇一八年度後期の京都大学における講義に基づく。

(すだ ちさと・本学大学院人間・環境学研究科教授)